夏の学校に対する研究室からの補助のお願い

2002 年度 原子核三者若手夏の学校 (文責: 東 武大*)

1　今回のお願いの背景

『原子核三者若手夏の学校』には、全国に 300 人に及ぶ素粒子、原子核、高エネルギー実験にかかわる学生が集まり、研究会や講義を通して活発な交流を行なっております。素粒子論グループの皆様方よりは、補助を長年にわたって賜っており、夏の学校の参加に対する経済的な負担を軽減し、夏の学校を活性化するうえで非常に重要な位置を占めております。また、夏の学校は日本物理学会・基礎物理学研究所・RCNP の協賛を頂き、特に基礎物理学研究所及び RCNP より経済的支援を頂いております。

しかしながら、現状では依然として夏の学校に参加するうえでの経済的負担は大きなものがあります。このような状況におきまして、このたびはスタッフの皆様に同じ研究室の学生の補助を、科研費から出して頂けますようお願い申し上げるものです。なお、今回のお願いは 2002 年 3 月 25 日に原子核三者若手が出席をさせて頂きました「核理論委員会」の方々の提案に基づくものです。この件について貴重な助言を頂きました核理論委員会、および若手 WG の皆様方にはこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。

2　夏の学校の開催目的・意義

「原子核三者若手夏の学校」(以下、夏の学校) は、日本国内の各大学及び研究機関に所属する素粒子・原子核の分野の研究に携わる若手研究者が、互いの交流を深めることで将来の研究の可能性を広げるべく、企画運営をしているものです。

この行事は、以下のような意義を持つものであり、2002 年度夏の学校で第 48 回目を迎え、連綿として続いてきました。

- 現在の素粒子・原子核物理学の研究の基本的な流れを掴み、分野全体の基礎的な知識を吸収する。
- 学生同士や講師との議論を通じて、今後の研究活動に必要な共同研究の基盤を形成する。
- 研究会などを通じて、学生が研究発表を行なうことによって、プレゼンテーション能力を向上させる。また、質疑応答によって研究に対する理解を深める。

多くの参加者が夏の学校を有意義であると捉えており、2001 年度第 47 回夏の学校にて行ないましたアンケート[1]の結果では **174** 人中 **111** 人 **(64%)** が夏の学校は有意義であったと回答しました。

- 上記アンケートの回答を抜粋:
  - 研究会・講義が勉強になった。
  - 他分野の話が聞けて良かった。
  - 研究会で発表することが良い経験となった。

*mail address: azuma@gauge.scphys.kyoto-u.ac.jp

[1] アンケートの結果は、http://www.tuhep.phys.tohoku.ac.jp/∼kakizaki/ss2001/index.html にて公開を致しております。

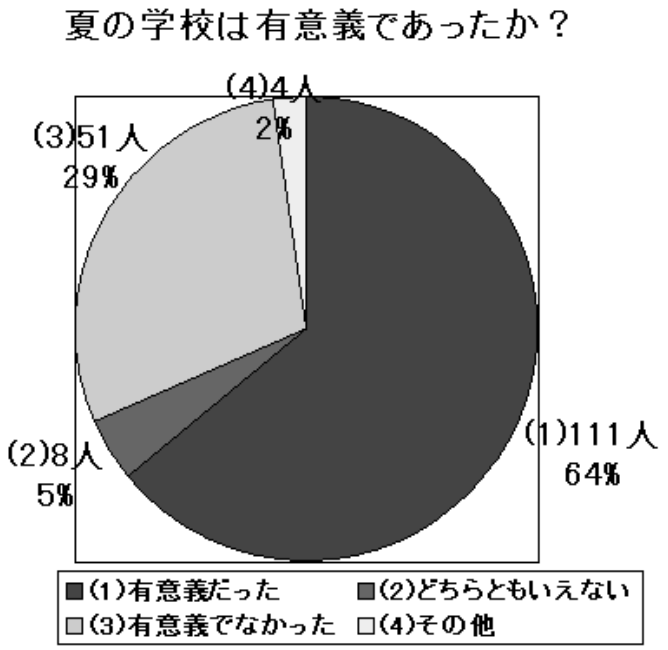


図 1: 2001 年度夏の学校アンケートの「夏の学校は有意義であったか」という質問に対する回答

* 他大学との交流が持てた。
* 視野が広まった。

3 研究室の補助の状況

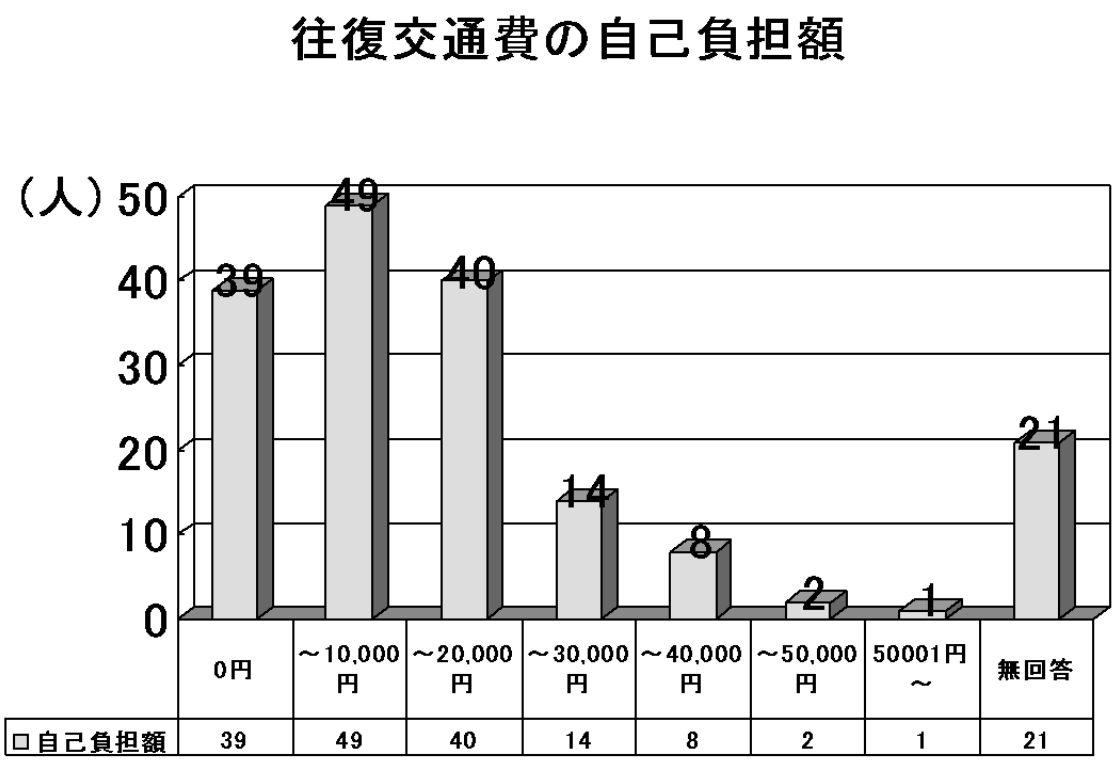
次に、研究室の補助の状況について説明をさせて頂きます。以下の記述は、2001 年度第 47 回夏の学校のアンケートの結果に基づくものであり、往復交通費についての実態調査の部分を抜粋したものです。

- 実施時期: 2001 年 8 月
- 対象: 夏の学校の全参加者 298 人
- 回答者: 174 人
- 質問内容:(アンケートの質問の一部を抜粋する)

1. 往復交通費は (文字通りに支払った額は) いくらかかりましたか。
2. 往復交通費のうち、自費でいくら出費されましたか (原子核三者よりの旅費補助の金額は現在のところ確定していないため、考慮に入れず計算をお願い致します)。
3. 旅費に限らず、夏の学校の費用に関して負担を感じておられますか。

   (1) 感じる　　(2) 妥当　　(3) 安い

これに対して得られた結果は図 2 のとおりです。



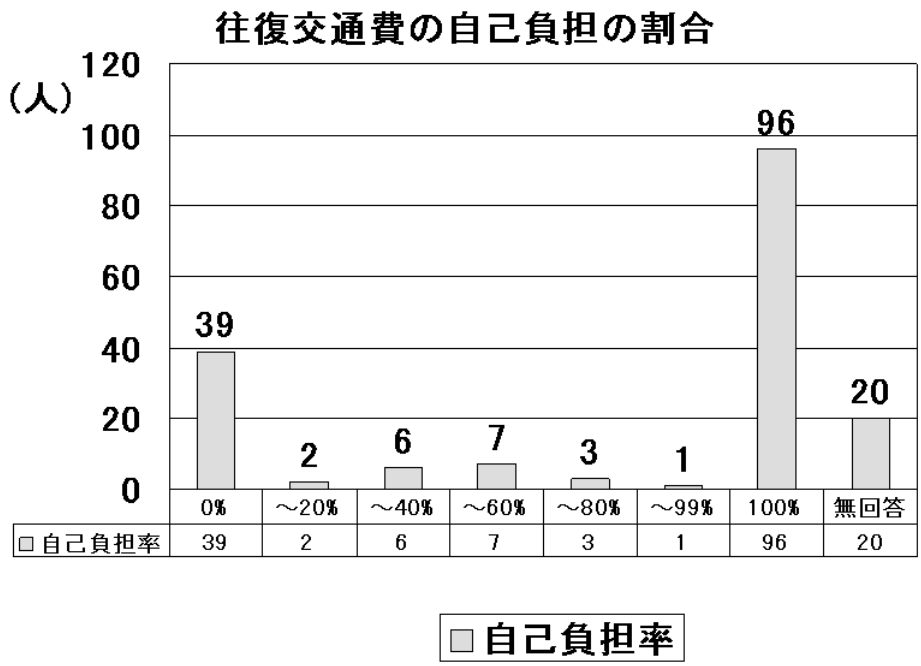


図 2: 質問 1,2 の回答分布

質問 1,2 では、実際にかかった往復交通費の (18 切符や自動車の相乗りなどの自己努力で節約したもの) 金額、及びそのうちの自己負担額の割合に関する統計を行ないました。なお、自己負担率については、上記の質問 1,2 の回答を基にして計算を行なったものです。

質問 1,2 の結果では、補助が完全に研究室から支給されている参加者と、まったく支給されていない参加者に二極分化しており、非常に多くの参加者が研究室からの補助を受けずに夏の学校に参加してきたことが分かりました。

- 「自己負担率 0% 」と回答した参加者は **154** 人中 **(**質問 **1,2** については **20** 人が無回答**)39** 人存在しており、これは全体の **25**% に相当します。これらの参加者は宿泊費も含めて研究室から完全に補助が支給されているものです。
- それに対して、「自己負担率 100% 」の回答者が **154** 人中 **96** 人 **(**全体の **62**%**)** にものぼり、これらの参加者は研究室より補助を全く受けていないものです。

また、2001 年度に夏の学校の会計より出した旅費補助は 約 **140** 万円[2] でしたが、それに対して (夏の学校の旅費補助を入れないものとして) 一人当りの往復交通費の自己負担は全国平均で **11,001** 円でした。2001 年度夏の学校の参加者が約 300 人であったことから、往復交通費の自己負担額は総額で約 **330** 万円となるものと考えられます。原子核三者若手の財政状況では、参加者の学生に対する交通費の補助を十全に行なうことができない状況にあります。

図 3: 2001 年度夏の学校の旅費補助支給状況

また往復交通費の他にも、多くの参加者は参加費 (3,000 円) 及び宿泊費 (1 泊あたり食事込で 5,250 円) を自費で負担せねばならず (したがって 6 泊 7 日全日参加した場合には **34,500** 円)、これらも合わせると参加者の負担は非常に高額なものとなります。

質問 3 の結果については、**174** 人中 **101** 人が「夏の学校の予算全体に関して、負担を感じる」と回答をしており、その割合は全体の **58**% にのぼるものです。

以上のように、多くの学生が夏の学校に対して研究室からの補助が支給されていない現状では、依然として夏の学校に参加するにあたって大きな経済的負担を伴うものとなっております。

[2] 2001 年度決算は Appendix. B をご参照下さい。

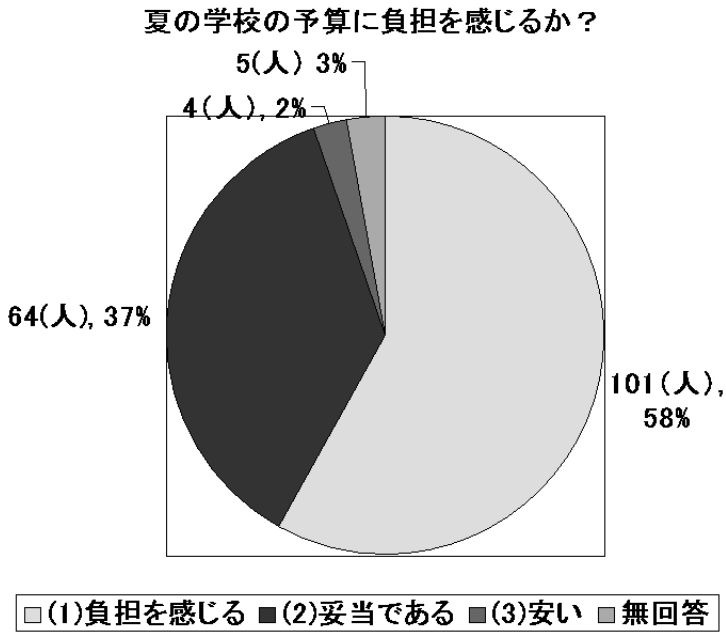


図 4: 質問 3 の回答分布

4　素粒子論グループのスタッフの皆様に対するお願い

三者若手は、若手研究者の交流の場となり、多くの成果を産み出してきた夏の学校を継承し、更に充実した行事にしていく所存であります。こうした若手活動に対し、今後とも素粒子論グループの皆様からの暖かいご支援を頂けますよう、お願い致します。

上記の状況のもとで、夏の学校の参加者の経済的な負担を軽減するために、もし研究室の予算に余裕がありましたら、

同じ研究室の学生の補助を、科研費より出して頂くこと

をお願い申し上げます。

夏の学校は若手が自主運営をしているものですが、同時に多機関より後援・支援を頂いている正式な研究会でもあります。従って、科研費を持つスタッフや学生が、他の学生を科研費で補助することも可能なものです。

また、お金の余裕のある研究室が学生に対して夏の学校の補助をして下されば、その分だけ三者若手の予算からの旅費補助をお金の少ない研究室の学生に回すことが可能となります。従って、こうした形で援助を頂けることは、微々たるものながらも研究室間の旅費の負担の格差を緩和できることにも繋がるものと考えております。

非常に勝手なお願いで申し訳ありませんが、三者若手は、素粒子論グループの皆様のご支援を賜ることにより、誠心誠意夏の学校の運営に取り組み、夏の学校を活性化させていくことを約束致しますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

A　2002 年度夏の学校活動計画

A.1　日時・開催場所

- 開催日程: 2002 年 8 月 1 日 (木) ~ 8 月 7 日 (水)
- 開催地: パノラマランド木島平 (長野県下高井郡木島平村上木島 3878-2)

A.2　2002 年夏の学校の講義 (敬称略)

- 素粒子パート:

  8/2(金),3(土): 「高次元ゲージ理論とゲージ階層性」　稲見 武夫　(中央大学)
  8/4(日),5(月): 「超対称性と階層性」　中野 博章　(新潟大学)
  8/6(火),7(水): 「超弦理論と量子重力」　磯 暁　(KEK)

- 原子核パート:

  8/2(金),3(土): 「クォーク・ハドロン物理における
  　カイラル対称性」　保坂 淳　(RCNP)
  8/4(日),5(月): 「原子核の平均場と殻模型 – 現状と展望」　中田 仁　(千葉大学)
  8/6(火),7(水): 「中性子過剰エキゾチック核の構造」　中村 隆司　(東京工業大学)

- 高エネルギーパート:

  8/4(日),5(月): 「LEP から LHC そして JLC へエネルギー
  　フロンティア – 実験の夢と現実」　山下 了　(ICEPP)
  8/6(火),7(水): 「謎の粒子ニュートリノと物理」　原 俊雄　(神戸大)

- 夏の学校特別講演:

  8/3(土): 「標準模型以前の素粒子物理」　小林 誠　(KEK)

A.3　講師を囲む会

各パートでは、各講義をお願いした先生を囲む懇親会を行ない、講師と学生の間の交流の機会を設けております。

A.4　研究会

各々のパートにおいて、学生による研究発表およびポスターセッションなどから構成される研究会を行ないます。また、原子核パートでは、最先端におられる研究者の方を招いて、その研究分野の最新の話題を講演して頂く「Topics 講義」、及び研究会における最新の話題の理解を助けるための「Review Talk」を行ないます。

A.5　講義録の作成

各パートで行なわれた講義録を web 上で公開しております。これらの講義録は第一線の研究者による教科書として広く活用されております。

A.6　セクハラ対策 WG の継続

一昨年の夏の学校では、女性参加者に対する悪質なセクハラ事件が 3 件起こりました。三者若手はこの事態を重く見て、「セクハラ対策 WG」を設立することでこのような不祥事を防ぐための対策を行ない、その結果として夏の学校の雰囲気の向上に繋がりました。こうした体制は、2002 年度へもしっかりと引き継いでいきたいと考えております。

B　2001 年度夏の学校決算

- 収入:

前年度繰越金	2,782,408 円
基研援助 (旅費)	484,640 円
基研援助 (印刷費)	46,200 円
素粒子論グループ援助	450,000 円
参加費	873,000 円
利子	3 円
合計	4,636,251 円

- 支出:

講師旅費	81,480 円
ポスター代	46,200 円
学生旅費補助	1,399,500 円
夏の学校運営費	399,068 円
次年度繰越金	2,710,003 円
合計	4,636,251 円

[sg-l 1201] でも報告をさせて頂きましたが、原子核三者若手は約 270 万円の繰越金 (2001 年度決算時点) が存在しております。三者若手はこの問題の反省を踏まえ、以下の改善を行ないました。

- これまで繰越金が増加する傾向にあった反省を踏まえて、2001 年度より旅費補助を夏の学校の事後に、参加者のキャンセルや運営のための費用が判明した後で算定を行ないました。その結果として、これまでのように黒字が累積する現状を解決しました。
- また、三者若手内部で繰越金の適正金額に関する共通見解を定め、**100** 万円から **150** 万円の範囲内と致しました。
- 2002 年度の会計では、これまでの運営のけじめをつける意味で、素 G 及び基研より援助を辞退致しました。